

INTERVIEW

地域医療振興協会 顧問・自治医科大学 名誉教授
富永眞一先生



学問的な基盤の上で、 地域医療を。

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

研究者の道へ

山田隆司(聞き手) 今日とは本年3月末まで自治医科大学の病態生化学教授を務められていた富永眞一先生のお話を伺います。富永先生には4月から地域医療振興協会の生涯教育センター長をお願いすることになりました。

まずは先生のご経歴から紹介していただけますか。

富永眞一 私は昭和26年に横浜で生まれ、小学校まで地元で学び、中学から東京教育大学附属駒場中学校へ通いました。「自分で考えなさい」というとても自由な教育方針の学校で、いろいろな経験をしました。八ヶ岳の麓にある寮に蝶々を採りに行くのが面白そうだと思って生物部に入ったのですが、教育大学で研究をしていた先生が顧問になられて、その先生が大腸菌から

DNAを取って棒に巻きつけて見せてくれたのですね。「これがDNAというものか!?! なんかキラキラしていて面白いなあ」と思い、将来は研究をしたいと思うようになりました。

山田 それが遺伝子との付き合いの始まりだったのですね。

富永 はい。ところが父が開業医だったので「人を診てからでも遅くない」と言われ、まずは医学部へ行こうと思いました。医学部へ行ったところ、自分は結構臨床も好きだと感じました。大学6年生のときに当時自治医大の血液学の教授をされていた高久史磨先生から「自治医大に見学に来ないか」という話をいただいて、見学に行き、実習の計画を伝えられたのですが、内科7科を順番にまわる内容で、大変なところに来

てしまったな……と思いました。

山田 その時には自治医大附属病院は開院していたのですね。

富永 見学に行ったのは昭和50年で、49年に開院していたはずですよ。

東京大学医学部附属病院では、1学年の約100人のうち50人くらいが内科に行きます。そうすると1人あたりの受け持ち患者は2～3人なのです。なので、自治医大のほうがずっと臨床の研修にはいいのではないかという印象をもち、自治医大に研修に行くことにしました。

そのとき内科のジュニアレジデント一年目は7人だったと思うのですが、それで全病棟を診ていたので受け持ちがいきなり10人前後なのです。受け持ち患者さんのうち重症の方が2～3人はいるので、夜はいつもレジデントがみんな病棟にいました。そして誰かが急変したというとき、みんながさーっと集まってきて、1人が血液ガス分析をして、1人が静脈をとる……という感じで、手分けをして、みんなで急変した患

者さんを診ました。それがすごく勉強になりました。また2年間の初期研修の中で何でもやらせてもらえました。

山田 新病院で、教授を筆頭に先生方がみんな若いし、臨床に関してすごく活発だったのですね。

富永 そうですね。そういうところでしっかりと臨床研修をさせていただき、とてもよかったのですが、中学のときに見たあのDNAが忘れられなくて、やはり研究がしたいと思いました。それで東大の大学院に入り直して、そこから基礎医学の研究の生活が始まりました。

山田 東大の医科学研究所(医科研)に行かれたのですよね。

富永 医科研の化学研究部に行きました。当時は技術を学ぶために半年くらい使うのが当たり前だったので、それをした上で微小管に付随したATPaseを精製してその性質を明らかにする仕事を始めました。そして脳微小管に存在する2種類のATPasesの部分精製に成功し、博士論文にしました。

新しい遺伝子ST2の発見

富永 その後医科研の助手を1年間務め、自治医大に助手として赴任しました。そのころ、アメリカに行かないかという話があり、中尾喜久学長にお願いしてエール大学に留学させていただくことになりました。エール大学ではインターフェロンに関する研究をしました。留学するとその施設の仕事をしなくてはいけないのです。

山田 そうなのですか。こちらでしていた研究の延長線上ではないのですね。

富永 でも、向こうの教授もなかなかだけた人で、「インターフェロンに関わることの中でも何の研究がしたいか?」と聞いてくれたのですね。

そこで私は「細胞増殖抑制効果を研究したい」と言ったのです。すると、「ハーバード大学の研究者が最近PDGF(血小板由来増殖因子)で誘導される遺伝子を2つ発見したので、そのプローブと細胞をもらってきなさい」ということになり、自分で車を運転してもらいに行き、インターフェロンが細胞の増殖を制御するという研究を始めました。

実験をすると確かに増殖を抑えていることが分かりました。それはセントラルドグマの転写過程ではなく、mRNAの情報を基にタンパク質が合成される翻訳の過程で効いていると思われ